

our pace

弓。

何故、俺は出席番号1番なのだろう。クラスの名簿を見た瞬間から、今年度は憂鬱だった。春の陽気な香がしつこく俺を煽るように窓から吹く。外では昇降口から登下校路とその両脇の桜並木まで見え、鬱陶しいほどの量の桜の花弁がクルクルと風に乗れり、落ちていくのが見えた。

教室は騒がしい。今日は進級に伴うクラス替えなのだ。

教師がこちらにやってくるまでに少々時間が余っているようで、他クラスの連中もちらほら侵入しながらクラスのメンバーの変わりように一喜一憂しているようだ。

俺としては、そんなことは心底どうでもいい。環境が変わったところで、人間とは慣れる生き物。数週間もすればこのクラスにも慣れていくのだ。そんなことは小中高と10回見てきている。11回目もどうせ変わらない。

高校2年のクラス顔合わせも、俺はこうして窓際に陣取って眉間にシワ寄せて桃色の風を眺めているのだ。

なんら変わらない。カウントダウンが進む以外は、な。

「はい、席につきなさい」

どこかで何度かすれ違ったことがある。そんな曖昧な記憶に残っていた40台半ばほどの男が、今年度の担任教師らしい。

教師は、今年は受験、就職の準備段階をしておく為の年になるだとか、勉学に励むようにだとか、そのような定型的な文句を口にした後、初顔合わせもあるだろうということで自己紹介の場を作った。

「桐野です」

この一言で、俺はさっさと席に着いた。所属している部活も無いし、趣味特技を人に話すような義理も無い。フルネームも要らないだろう。去年の経験を見るに、俺の呼び名はどうせ「キリノクン」だ。

文系のクラスだからか、男子よりも女子の方が若干数が多い。つまりは男子の人数が少なく、俺の興味が薄れる前に……いや、例えそうでなくても俺の興味はとある男に向けられていたはずだ。

新クラスでの初顔合わせ、にも関わらず、奴は机に突っ伏して寝ていた。

「おい八島、後ろの奴起こしてくれ」

直前で自己紹介をしていた八島が露骨に嫌そうな顔をしつつ後ろの男を起こす。

「自己紹介」

「ああ？ ああ、吉川」

それだけ言い、吉川は机にヘッドバットを決めて再び夢の世界へ旅立ってしまった。折角起こした八島は舌打ちをして前に向き直る。

「……じゃあ、次」

担任はもう吉川のこととはある程度他から聞いたのか、諦め顔で自己紹介を進めていった。

この吉川、何事にも無関心なのか、それともこの集会在嫌なのか分からなかったが、俺はこの時今日初めて物事に興味を持った。

友人との付き合いや、午前中だけの学校の束縛からの解放による部活動、娯楽。この集会在終わればいくらでも楽しみなことがあるはずで、吉川の例外なくそれらに当てはまるのだろう。だとしたら、この集会在そわそわする気持ちは分かるが、突っ伏して寝るなんてことがあるのか？

『まさか吉川が俺と同じ境遇だなんてことは』

そんなことが脳裏を過ぎった。

*

吉川という男はとにかく変わった男だった。初日から変な奴だったが、進級して2日目の今改めてそう思える。

見たところガリ勉タイプと見切っただけか、八島に進級直後のテストについて聞いていたのだが、その内容が範囲、時間割、マークシートか否かといったシステムの質問ならいざ知らず、

「八島、このテストって赤点無いよな？」

「……実力を計る名目だから赤点はないけれど、志望校の判定も出るだろうから」

「いや、そこまで聞いてねえから。赤点無いって判れば充分」

そこまで言うとは、また眠りこけるのだ。

結局、吉川はそのままテストが終了するまで熟睡して、今こうしてクラスに置いていかれている。今日の日程は午後から体力測定なのだ。

自然とグループから離されてしまった吉川と、延々拒み続けて独りになっていた俺が、まあ昼休みに浮くのは当然だ。

「吉川、起きろ」

「……誰？」

「桐野だ」

親切心で起こしてやり、ついでに焼きそばパンを渡す。

「うへえ、炭水化物に炭水化物かよ」

「違う。これは焼きそばにパンを組み合わせたジャンクフードではない。焼きそばパンという1品目の料理だ」

「屁理屈じゃねえか」

言いつつもしっかりと受け取る吉川。コミュニケーションが嫌いなようではなさそうだ。

「で？これはなんのつもり？」

「いや、次体力テストだから。親切心で恵んでやった。俺の溢れ出る優しさを噛み締めて食え」

「だったらノーサンキューだ」

ジョークもそこそこ通じる。全く謎な奴だ。

「時に吉川。お前、昨日かなりぞんざいな自己紹介だったから気難しい奴かと思ってたけど」
「自己紹介なら桐野も同じようなもんだっただろ？」

寝てる振りしてしっかり聞いていたらしい。というか名前知ってるんだったら名乗らせるなよ。

「……話を戻すけど、なんでこうして話すのは普通なのに自己紹介だけは雑だったんだ？ 少し気になってな」

「あー」

吉川は頭をポリポリと搔く。書き上げられた短髪が一瞬クシャっとなってから針金のように元に戻る。

「なんとなく覚えてもらいたくないというか。去年から覚えてる奴もいるからな～とか。ううん、言葉ではよく表せないんだが、中途半端に自己紹介しても意味無いからな。そんなことするのはなんか釈然としなかったんだな。どうせなら俺を必要としている瞬間に自己紹介をしたいというか。曖昧だが、そんな感じだ」

答えつつ焼きそばパンを頬張る。無い知恵を搾るアホを見るような仕草とパッとしない返答だったが、それとなく吉川という人間が見えてきた気がする。

中途半端が嫌いで、それでいて面倒くさいのも嫌いなだけだ。うろ覚えで認識されるような全体の自己紹介をするくらいなら、吉川と喋りたい奴から「お前誰？」と聞かれる方がいい。そんな思考を持っているということだった。

謎が解けたらしょーもない。

さっさと奴を促すことにした。

「吉川、なんで周りはみんな体操服か分かるか？」

「そりゃあ、桐野が言ったように体力テストがあるからだろ？」

「そうだ」

「……」

「……」

「……そういうことは早く言え！」

急いで体操服を取りに行く吉川を見送り、俺はひとりごちる。

「まあ、そこそこ楽しかったかな」

*

50メートル走。陸上部、野球部が速いと相場は決まっているが.....それでもクラスメートが盛り上がる種目だ。

小学生の時代は足が速いだけで人気上がる程なのだから、そうそう卑下できるものではない。

「よーい、はい」

勝手にスターターに任命された奴の腑抜けた合図で俺と隣が走り出す。

ふと、「吉川は本気を出すのだろうか」と走りながら思う。中途半端なことをしないと聞いたあいつのことだから、この短距離走くらいはしっかり走るのだろう。勉強は（あのテストの受け方を見るに）得意ではないということは、もしかしてあいつスポーツマン？

「桐野、7.5。しっかり走ってたか？」

「はあ」

生温い返事を体育教師に返して、邪魔にならない程度にそこに留まる。吉川の順番はもう少し後だ。

何人かの生徒が息を切らして走り終わり（50メートルで息を切らすなよとは思いつつ見ていたが）吉川がようやくスタートラインに「屈んだ」。

クラウチングスタート？

陸上での短距離のスタートで有名なアレだ。実際は使い慣れていないと逆に遅いから大抵の生徒はスタンディングスタートだったのだが.....。

「よーい、はい」

一瞬だけ、吉川の気だるそうな目が変わった。50メートル離れていたから気のせいと言われてしまえばそこまでののだが、それでも吉川が目が鋭くなったように思えた。

気の抜けたスタートの合図にしっかり合わせてのスタートダッシュ。短距離選手や、足の速い野球部にも匹敵.....いや、それ以上か？とにかく隣の生徒を一気に抜き去ったのだ。

「吉川、7.1」

それでもタイムは平凡。そりゃあそうだ。後半明らかに力が抜けていたからな。

あのまま走っていたら、陸上部にでも薦められるんじゃないだろうか。

「あっ、桐野。俺、お前より速いよな？」

特に疲れた様子も見せることなく俺の所までやってくる。悪戯っぽい笑みだが、どうも昨日の不機嫌な顔と比べると一致しない。

「吉川、本気出せよ」

「お前もな」

……ごもつとも。

同じ文句で揚げ足を取られるとは。不覚。

「吉川、陸上か何かやってたのか？」

「昔にチョロっとな。今はもうほとんど覚えてない」

「嘘付け。あのスタートダッシュはおかしい」

食い気味に言うと、吉川は「あー」と曖昧な返事をした。頭を掻き、少し考えてから口を開く。

「まあ、陸上な。スタートダッシュは覚えてるんだよ。『だけ』、はな」

「今度本気で走ってみてくれよ。ちょっと好奇心が」

「嫌だよ」

何をそこまで頑なに断るか分からなかった。スタートダッシュは見せられるのに、その後が見せられないというのもおかしい話だ。

そんなことを思っていると、吉川の方から理由が返ってきた。

「だって、お前に見せるとさ……なんか厄介なことになりそうだしな」

「なんだよ、厄介って」

「桐野って、変にオッサン臭いというか団塊っぽいというか。『若いうちにこれをやっておけ』とか『後悔しないようにしろ』とか言ってくるタイプな気がしてさ」

コイツは……。

ちゃらんぼらんしている癖して、妙な部分で鋭い。

確かに、吉川の走りを見て「陸上部に入っていい成績が取れる」だとか「野球部で盗塁王になれる」とか言いかねない。現に、吉川の走りを見てからこんな話題にしたのも、それが主な理

由だ。

俺には未来が無い。コイツには未来がある。

それだけで、俺がオッサン臭くなる理由としては充分だろう？

吉川、お前は中途半端なことが嫌いじゃないのか？今回の走りは中途半端ということじゃないのか？

全ての種目が終わり、タオルで汗を拭きつつ、俺はまだ吉川に食い下がっていた。

「ああもう、うるせえよ」

「昨日と今回とでお前の言ってることに差異があるんだよ。俺は気になるんだよ」

「いいじゃねえか、友達じゃあるまいし」

ドクン。俺の心臓が飛び上がるような一拍をした。

確かに、俺と吉川は知り合って2日。話すようにはなったが、未だに友人と呼べるには若干の溝が……いや、そういうものじゃないんだ。

この短期間で、どうやら吉川は気づいてしまったようだ。

『俺には友達を作る気が無く、そういう関係は受け付けない』

俺には時間が無い。この先、どう生きるかという夢すら抱かせてくれないままに、この胸糞悪い世からさっさと旅立ってしまうことは確定事項なのだ。

勿論、そんなことを親友がいるならいざ知らず、出会って2日の吉川に教えるようなアホではない。それでも、俺がクラスメートから一線置いていたり、どこか諦めたような空気を奴なりに察しているのかもしれない。

友人を作るわけにはいかない。大事な人こそ、俺なんかの存在を失う事を悔やんだり悲しんではいけないのだ。

「そう、だな」

声が震えていた？いやまさか。だが、顔の筋肉が上手く機能しないせいで笑顔が作れないのは鏡を見なくても分かる。

分かっている。俺はコイツと友達になりたい。

随分昔の話だからあまり覚えていないが、本能で分かる。コイツは、吉川は一生共にしてもいいくらいに、俺と波長が合うんだ。絶対に。今、「なんだよ、友達だろ？」とかなんとか言って安い学園ドラマ見たく友情を確認だなんてことも出来るかもしれない。

でも、それは出来ない。

「じゃあ、俺、戻る」

「お、おう」

ホームルームがじきに始まる。俺は重い足取りで窓際の自分の席へ戻った。

ホームルームが終わり、帰る者、部活動へ行く者が騒ぐ合間、珍しいことに吉川が俺の席へやってきた。

「桐野」

「吉川？お前、寝てなかったのか」

「まあ眠かったが、それはさておきな」

さておきな。そしてこの短時間で寝ようとするな。

そんなツッコミすら出来ない。今恐らく俺は、とんでもなくやつれている。吉川の変な言葉のせいで色々思い出してしまい、色々と考えを巡らせてしまったのが原因だろう。吉川も気づいたらしく「老けたな」と言われた。ほっとけ。

「陸上部は今日、新入生の顔合わせのミーティングがあるのを知っているか？」

「知らん。陸上部じゃないし」

「今俺が教えたから知っているよな？」

「.....何が言いたい？」

はあ、とため息をつく。なんなんだ。早く帰りたいんだが。やること無いけれど。

「陸上部がトラック使っていないんだろ？俺が全力で走ってやるって言ってるんだよ」

「はあ？」

どういう風の吹き回しだ？

さっきと言っていることが全く違う。

「なんで、急に」

「いやあ、な？」

突然口籠る吉川。癖なのか、相変わらず短い髪をガシガシ掻く。

「なんというか、桐野ってあんまり友達作りたくないのかなって思って、さっきはあんな発言したんだけど.....なんか気持ち悪いというか、とにかく、俺なりのケジメ。深くは追求するな。俺にもわからん」

その代わりに、俺の才能を見出しても何も言うな。それが、吉川の交換条件だった。

友人ではないけれど。そんな建前で吉川が条件を出してきた。吉川は陸上競技として走りたくない。だが、このまま俺に走りを見せないままにいるのも気分が悪い。利害の一致というものだろうか。

「あ、あと帰りにジュースでも奢れ」

「それは交換条件に入っていないな」

「それって、条件に入ったら奢ってたってことかよ！畜生騙された！」

騙してねえよ。

*

桐野、吉川。

クラスの中でも浮いている2人がさっさと教室を後にして、陸上部がいなく、体力テストの直後のため50メートルのラインが引いてあるトラックに制服姿のままやってくる。そんな珍妙な姿は、クラスメートの一部の目にしっかり映っていた。

「ふーん、あの2人、仲良かったんだ。意外」

「向さん、先生が呼んでる！」

「どうせテストの採点云々の話でしょ？あの先生、自分は統率する気無い癖に他のクラスとの平均点は比べたがるのよね」

向は去年も同じ担任に世話になっており、去年に引き続きクラス委員長を任されているのだ。ソフトボール部の期待のエースとの声も掛かっており、人徳もあると自負している。

別に仕切りたがりではないと思う。だが、指定校推薦を取ろうと思うと、クラスのまとめ役を買って出るに越したことはないはずだ。下心、と言ってしまうとイメージが悪いが、自分の将来を見越しての計画性のある学校生活も乙というものだ。

「平均点、クラス上位だったら呼び出されないだろうな～。誰か局部的に悪かったらそいつが呼び出されるだろうし……今回は全体的に悪かったのかね？」

「向さん、先に部活行ってるよ！」

「うん、私も用事終わったらすぐ行く」

気づいたら教室には人がほとんどいない。大人しそうな女の子が1人、本を読んでいるくらいだ。

さてさて、どんな説教をされるのかね？私は悪くないんだけどな～。

向は軽快に廊下の階段を駆け下りていった。

「結構、速いですね。2人とも」

ひとりきりになった教室で、先ほどの女の子がチラリとトラックの2人を見た。

クラス替えから1週間。俺の思ったとおり、このクラスも皆が皆「慣れ」ていき、喧騒もある程度まで少なくなる。ある程度まで、だ。

というのも、この私立高校の毎年度の恒例行事「1泊2日オリエンテーリング合宿」というものが存在する。簡単に言ってしまうえば、高校と提携している施設への班行動による宿泊とそれぞれが分かれての小旅行のようなものだ。

クラスの団結力を高めるとかいう建前のようなのだが、まあ言ってしまうえば合宿先の名売りなのだろう。この学校は運動部に力を入れているため、この合宿施設は部活動単位でも簡単に、しかも格安で合宿の予約が出来るらしい。

「吉川、お前妙に詳しいよな」

「ほっとけ」

ここまでが、20秒前に喋っていた吉川の受け売りである。

今日の6時間目がロングホームルーム。小中学校でいうところの学級活動の時間で、先日のテストの詳細な偏差値などの説明と個人情報の配布が終わった瞬間に担任が「うるさくしないなら、時間まで合宿での自由行動のプランでも考えろ」と言ってから教卓にノートパソコンを置いて作業を始めてしまったのだ。

喧騒もある程度まで少なくなる。ちょっと語弊があったな。この「適度にうるさい環境」で使う言葉ではなかったようだ。

「吉川あ、オリエンテーリング」

「寝る」

「あ、そう」

団結力だの協調性だのとは180度違うベクトルに構える俺たちとしては、どうでもいい時間であることに間違いは無い。

吉川は「中途半端な馴れ合いは勝手にどうぞ」テンションだし、俺も「こんなことに時間を使っているのだろうか」とため息をつく現状だ。

なんかもう、八方塞がりだ。今すぐ死んでも後悔するし、今死ななくても何をしていいのか分からない。ただ生を貪るに留まって自殺を全く考えていないのが自分でも不思議なくらいだ。

「おいそこの中年2人」

中年とは失礼な。そんな言葉すら出なかった。

俺に話しかけていたのは吉川でもなければ担任でもない。クラスメート、それも女子の声だったのだ。

声の方向を見ると、スポーティな短髪が良く似合う女の子だった。

「……なにか用？」

腰掛けていた吉川の机から降り（その隙に吉川が自分の机にうずくまって寝る体性になった）と
りあえず向かい合う。平均身長が俺が少し見下ろす程度。背丈は163センチといったところだろ
うか。

「私としてはあんまりあんたらと喋る気も無いんだけど、委員長なので」

「委員長に咎められるような狼藉をした覚えは無いけど？」

「そんな固い言葉やめてくれないかな？めんどくさい」

人差し指を俺の額にあててくる。委員長に相応しい言葉のバツサリ感だ。歯に衣着せぬとはまさに
にこの事……そんなことを考えるから「めんどくさい」のか。反省。

「俺らが何かしたか？」

（「ら」を付けるなこんちくしょう）

寝る体性から動かない吉川から無言のプレッシャーが掛かる。こいつ、委員長が面倒だから寝る
振りする気か！？

「今回のテストの話よ。先生、クラス平均を結構気にする人だから、この前私が呼ばれて言われ
たのよ。もう少しなんとかならんかってさ」

「それなら俺より吉川だな。こいつ、今回全教科白紙じゃなかったか？」

「それも知ってる。で、だからといって、私の忠告だけで吉川が勉強なんてしないのもなんとなく
分かる」

ピクリ、吉川が少しだけ反応する。まあ凶星なんだろう。

「で、委員長は」

「向よ」

「……向さんは俺にどうしてほしいわけ？」

「吉川の点数を上げてほしい。ついでに桐野、お前の点数も一緒にね」

面倒くさい奴に捕まったな。

「俺は自分の成績のキープで精一杯だよ。教えるなんて出来ないし」

「死ぬ気で頑張れば平均くらいには上がるでしょうに。ちょっと見てきてあげる」

そう言って向は俺の机に放置されていた成績表を拾い上げる。というかやめろ。

「返せ」

「ちょっとくらいいいじゃないのよ！えーっと」

向は勝ち誇ったような顔で俺の成績表を見ていたが、そのテンションが萎縮していき、やがて弱ったような手で成績表を手渡してきた。

「何よコレ！」

「俺の成績表だ」

「そんなこと分かってるわよ！この成績はなんだって言ってるのよ！」

「それは出席番号1番の桐野という男の新学期の実力テストの成績だ」

「だーかーらー！私が言ってるのは、なんであんたみたいな天然窓際男子が学年順位31位なのかを聞いているのよ！」

周りは自分の事で一杯一杯だったようで聞こえていないらしいが、突っ伏して寝た振りをしていた吉川には聞こえたようだ。わざわざ起き上がって俺の成績表を見に来た。

「すげえな。今回の英語長文記述、難しかった気がしたんだがな」

「そうそう！……ちょっと待って！なんで吉川が今回のテストの内容知ってるのよ！」

「いや、俺も受けたし」

吉川の成績表をひったくる向。

「……ほっ」

「ほっとしてんじゃねえ」

向の挙動が直ったところで、改めて今回のありがた迷惑について言及。

「向さんよう、俺はともかく、桐野に成績上げろってのはちょっと違うんじゃないかな？」

「まあ、言うならもっとアホっぽい奴をだな」

「ごめんなさい！」

いや、そこまで平謝りしなくても。

「知り合いに聞いたのよ。成績を上げてもらうなら吉川だって。で、吉川を説得するなら桐野だって。私ってば、それをはき違えてこんなことを」

「いやいや、もういいよ。ほら、もうすぐチャイム鳴るから。席に戻れよ」

いそいそと戻っていく向から目を逸らし、まだ俺の席付近にいる吉川に一言漏らす。

「嵐のような奴だったな」

「……桐野」

「勉強は自分でやるものだぞ吉川」

「……おう」

「しかし桐野、お前なんで勉強できるんだ？」

チャイムが鳴るまで残り1分少々といったところ。再び俺から成績用紙をひったくって数字を見ている吉川。

「他にやること無いしな。少しは勉強しないと」

「お前って人生で無駄なことは切り捨てるタイプじゃねえの？ 勉強とか必要ないもんだと思うんだけど」

学校では荒事をしない。勉強もしっかりやる。それが、学校で合理的に過ごす方法だ。赤点ギリギリでも家庭訪問が来たら穏やかじゃない。家で暇を持て余すよりは、俺は余生を「高校生する」ことを選んだというだけ。

余生なり余命なり、物騒な単語を伏せつつ吉川の質問に答えると「へー、じじくせえ」と言われてしまった。ちょっとショック。

担任がそそくさとホームルームを終わらせ、クラスメートはそそくさと家路につく。今日はオリエンテーリング前日ということで部活動が無いということだ。これも吉川の受け売り。

「で、オリエンテーリングって何を持っていけばいいんだよ？」

「俺に聞くな。俺が知ってるのは部活動と学校行事の大まかな内容だけだよ」

「なんでそんなに詳しいんだよ」

「企業秘密」

どうせ、去年と同じ場所なんだろう？ 飯は弁当やバイキングだろうし、昼の散策も大した制約は無かったはずだ。規定のジャージと、まあバレないようにケータイの充電器とゲーム機くらいは持っていくか。ああそうそう桐野、オリエンテーリングはどうでもいいけどさ、現地で遊べる場所ってあったか？

「……」

「なんだよ」

「吉川、お前本当は楽しみだろ？」

「バカ言え。逆だ。行かなきゃいかんってんだから、出来るだけ楽しむんだよ」

ああ桐野、麻雀出来る？ カード麻雀なら持ってるんだが。

言い訳を叩いた口でそんなことを言われても説得力に欠けるというものだ。

*

「向さん、オリエンテーリング、一緒に回ろうよ」

「散策コース歩くだけでしょ？ 一緒になって言ってもどうせみんな一緒じゃない」

「それでもよ」

「構わないけど、出来れば女子全員で固まりたいね」

向の一言だったが、話しかけた女子生徒は少し困った顔をした。

なんとなく理由は分かる。原因、というか話の中心は彼女だ。

成績配布から自由時間をもらっても、読書をするにとどまっていた女子生徒。昨日最後まで本を読んでいた彼女だ。

桐野のようにぬるい仲良し関係を嫌うような素振りも見せないのだが、目だった言動も無くただ単に読書をしているだけの彼女もまた、グループにあぶれてしまったひとりだった。

麻生さん。

自己紹介で部活動やら得意科目やらを話す皆の手前、苗字を言うに留まった3人目。残りの2人は言わずもがな、窓際の席でくだらない話をしている中年っぽい奴らだが。

物静かで、クラスメートにも敬語。肩甲骨まで伸ばした黒髪を切りそろえる、いかにも「優等生」スタイルなのだが、寡黙というか、自己紹介以外でまともに喋っているのを見たことがない。やや低い身長に華奢な体つきが、ヘアスタイルに合わせていかにも「文系優等生」であり、スポーツの類はノーサンキューというイメージだ。

「麻生さん、まあ、一声かけてみるかな。別に嫌いとかじゃないんでしょ？」

「うん、でもちょっと話しかけづらくて。向さん任せるね」

「まかすとけー。全ては指定校推薦のためだって」

「嘘でも麻生さんのためって言ってあげてよ」